

「ひかりの足跡—ハンセン病・精神障害とわが師わが友」(大谷藤郎・著)

評者：近藤 克則 日本福祉大学社会福祉学部教授

一度しか会っていないのに忘れられない人がある。私にとって大谷先生がそうである。会ったのは私が医学生時代、先生は厚生省(当時)の局長であった30年前である。自己負担の引き上げなどの医療制度改悪やプライマリケア軽視の卒後研修制度などに義憤を覚えていた私は、それらを設計している厚生省のお役人とは、偉くなるほど初心をすり減らしてしまった人たちだろうと勝手に想像していた。しかし、先生は違っていた。本書の随所に書かれている厚生省に入られた初心「医者にかれない社会的弱者含めたすべての人びとに、医学医療が公平に行き渡って欲しい」という思いを私に語った。そして第三章で紹介されている画期的な精神障害者実態調査(1963年)で現実を捉え、それを元に精神衛生法を改正(1965年)したことを例に、現実社会の厳しい制約と闘いながら、医療と社会を少しずつ変えていくのが官僚の仕事だと教えてくれた。

著者は退官(1983年)後、財団法人藤楓協会理事長や国際医療福祉大学学長などを歴任され、さらにハンセン病(らい)国家賠償訴訟を巡る裁判の証人などとして闘い続けてきた。ただし、元官僚として国や自分たちのやってきたことを正当化し弁護する立場ではない。反対に、その過ちを認める立場であった。なぜ、そこまでしたのか、その答えも、この本の中にある。ご自身が多重がんなどを患った病身をおして、らい予防法の廃止(1996年)、ハンセン病問題基本法の成立(2008年)に向けて奔

大谷藤郎(著)、メジカルフレンド社、2009



走された原点は、1943年の小笠原登先生(京都大学助教授)との出会いにあった。当時18歳。大谷先生にとってハンセン病は、恩師の志を継ぎ、実に半世紀以上かけたライフワークだったのだ。

本書には、このような師や人々との出会い、その中で培われた社会観や人生論、成し遂げたかったことが書かれている。ハンセン病(第一章)の小笠原先生に始まり、秋元波留夫先生など精神障害(第三章)に関わった医師、難病・重度心身障害児(第四章)に関わり「この子らを世の光に」の言葉を残した糸賀一雄先生などに加えて、患者・家族など当事者も登場する。さらに若月俊一佐久総合病院長など社会医学の系譜(第二章)、戦後の医学・医療の指導者(第五章)としてプライマリケアを掲げたマラー WHO 事務総長、武見太郎日本医師会長、日野原重明聖路加国際病院長など、そうそうたる顔ぶれである。

医療技術だけでは救えない人たちがこの社会にはいる。世界人権宣言や日本国憲法に謳われた基本的人権や平等、「共に生きる社会」の実現を必要としている人たちだ。その実現のために闘い続けてきた人たちと出会い、自らも闘ってきた著者は書いている。「私たちはこの社会をつくり変えることができる」と。